

農繁期託兒所の普及

倉 橋 惣 三

農繁期託兒所の普及は、最も喜ばしいことである。我國從來の兒童愛護施設に於て、此の施設の如く、急速にして顯著なる普及を遂げたものは蓋し他にない。之れ一つには其の施設經營の簡單容易なるが爲でもあるが、主たる理由は、その趣旨の社會的必須にある。世に、之れ程必要の多いものは少なく、その必要の明らかなるものは更に少なく、殊に、實際的に効果の分り易いものは少ない。今や全國に亘つて、その數の一期毎に増加するのみならず、篤志者の事業から、自治體當然の事業として、その本質を認めらるゝに至つてゐることは、あたりまへのことゝは言ひながら、欣快の至りといふべきである。

而して、此の狀況を促したる、諸種の原動力に就て見るに、古くは其の精神を佐藤信淵に溯ることも出来るが、余の聞知する處に於ては、明治四十二年の頃、鳥取縣のものを以て最初として、その後岡山縣、愛媛縣、山口縣等それ〴〵近代の起源をなしてゐるものゝ如くである。しかも、近く、此の事に、顯著な貢獻と寄與とをなせるものは、愛國婦人會の此事業の實施と、大阪朝日新聞の獎勵とであらう。いづれも、社會的謝意を禁ずることが出来ない。

尙ほ、此の施設の普及の效果に就ては、更めて説くまでもなく、全國幾萬の幼兒が、從來殆んど放任

せられたる農繁期間の不幸と危険とから保護せられたことにあるは勿論であり、それ以外の効果は以て副次的となすべきであらうけれども、そのづからの影響的結果として、農村に幼児愛護の精神を啓發せることは必ずや多大なるべきを信じて疑ひ得ぬのである。農繁期託兒所は、農繁期託兒所であり、それ自體の純なる動機を以て經營せらるべく、之れに他の多くの附帶性を要求せぬ方がよいとは、多くの識者の論ずる通りであるけれども、そのづからなる結果が、幼児愛護の一般的精神を促進することは、拒むことが却つて六かしいことである。而して、その結果は、家庭の内にもあらはれるであらうし、社會的に常置機關の形となることもあるであらう。短き農繁期の事業の、ひいて及ぶべき處は、長くして廣いものともなるであらう。

但し、之れは、傍から見、後から顧みてのことである。當面の問題は、各農村に、此の施設を必要とする幼児達の生活、そのものゝ當面的凝視にある。従つて、その幼児達への愛護の周到さにある。身體をもつと共に、素よりこゝろをもつ彼等の愛護そのものにある。而して、之れが爲に、其の第一の衝に當る保姆諸君の勞や、まことに重要なると共に、深く察し、厚く謝すべきである。本誌が各地の農繁期託兒所の實際を問ひて、第一に感ずる處も亦その點である。

兎に角く、眞に社會に必要なものは、そのよき實例を以て世に普及する。徳孤ならず必ず隣ありともいふではないか。今年一つのよき農繁期託兒所は、必ず隣を生ぜずにはゐないであらう。全日本を通じて、少くも一部落一農繁期託兒所は、理想といふよりも當然である。

(農繁期託兒所の經營に就ては、富山房發行、余及耕田君共著同書名のパンフレットを参考せられたい)